

# ロスアンゼルス行き特急列車 —犬養道子結核療養の旅

結核予防会顧問

結核予防会アーカイブ委員 石川 信克

犬養道子さんと言えば、著名な評論家で名高い。祖父犬養毅首相は1932年5月15日、一部の青年将校らによって暗殺された。上流ながらリベラルな家庭環境の下で育ったが、独立心が強く、あらゆる時に自分でアルバイトをしたりして、意欲的に勉強を続けた。1947年、戦後まもない時に27歳で渡米、ニューヨークの大学で学んだ。

ニューヨークでは奨学金を受けていたが、生活や学費の補助のため、アルバイトをしながら懸命に生きていた。過労のためか、結核を発病した。当時は、結核の治療と言っても、栄養、安静を主としたサナトリウムに長期に入院する療養が主で、人工気胸なども盛んに行われていた。唯一の抗生剤ストレプトマイシンもまだ使用は限定的であったらしい。

犬養さんの結核療養の日々について、著書「アメリカン・アメリカ」（文芸春秋社2017）のコモン・マンの章から一部を引用・編集して紹介しよう。

## モンロビアへの列車の旅

学友たちのカンパと斡旋で、西海岸に近い療養所に入院することになった。1948年の晩秋、彼女は、ニューヨーク発ロスアンゼルス行きの特急列車「ユニオン・パシフィック特急」に乗った。4泊5日の旅である。行き先は、最終地より手前のモンロビアにある結核療養所であった。持っていたのは善意のアメリカ人友人の買ってくれたニューヨーク・ロスアンゼルス間片道切符一枚と、東京のマッカーサー司令部の判が付いた占領下のパスポート、また流行おくれの小さなスーツケースで、着ているものはややみすぼらしい服と、古い毛布を細工して縫った半コートであった。

乗りこむとすぐ、列車付黒人ボーイを呼んでベッドをつくってもらい、ベッドにもぐりこんだ。熱があり、咳もはげしく、からだは痛い。挫折した留学の夢。砕かれた青春の理想。心の痛みはからだの痛みをまわった。

列車がニューヨーク州西端の溪谷にさしかかるこ

ろ、食堂車のベルが鳴ったが、夕食に行かなかった。あまりに苦しかったのと、財布の中味が乏しかった。当時、奨学金学生に給与される小遣いは月十ドル。占領下の日本からの送金は不可能であった。列車はデトロイトに一時停車した。二時間の停車時間に、他の乗客は町に行って昼をすませた。ここでも彼女は食事をぬいた。さすが空腹にたえかねて、あのボーイを呼び、一番安くて、十セントのトマトサンドイッチと三セントのオレンジジュースを取り寄せた。翌日、もう一度ボーイを呼んでトマトサンドイッチとジュースを頼んだ。

「ミス、食堂に行かないの。食堂にも安いものはあるよ」「気分が悪いんです」「ミス。病気だよ、あんだ。どこまで行くの」「モンロビアの病院」。モンロビアは、結核サナトリウムが十近くも建てられていた、常夏の空気のよい谷間の町である。その駅は、ロスアンゼルスからかなり引き返さねばならない。「ロスからどうやってモンロビアまで行くんかい」「バスで」。ボーイは白人の車掌を連れてきた。そこへのバスの便はあまりないらしい。会話が終わって二人は引き返した。

終点ロスアンゼルスに到着する前日の夕方であった。グランド・キャニオンを列車が渡り終えたとき、車内アナウンスがあった。吐き気と咳に苦しみながら、ぐったりと横になって聞いていた。アナウンスはこんなことを言いはじめた。「車内の皆さま。列車は明朝終点に着きますが、終点ロスアンゼルスの手前、モンロビアに一分間、停車いたします」。

「皆さま、この列車には、病気で、モンロビアの病院に行く日本人留学生が乗っています。大へん苦しいのです。ロスアンゼルスからバスでモンロビアに行くのは、大へんなことです。で、乗務員一同は昨日ワシントンの鉄道省本部に電報を打ち、臨時停車の許可を乞いました。返事がきました、『停車せよ』と。さらに『モンロビア駅長への連絡及び留学生のための担架手配は本省がすでに行なった』と。皆さま、明日の第一の停

車駅はロスアンゼルスではありません。終点到着が数分遅れることを御了承ください」。

彼女は、感動のあまりに泣いた。「ああ、デモクラシーとはこう言うものであったのか、コモン・マン（普通の市民）の伝統とはこう言うものなのか。これなら敗けるのは当然だった」。

翌朝、小さなモンロビア駅には、駅長と迎えの担架とが出ていた。列車をふり向くと、あのボーイや車掌が見え、窓には多くの人が顔を出して叫ぶ、「早くよくなれよ」「神のおめぐみを」「必ずよくなるから安心しな」「勇気を忘れずにね」。

動き出した列車からホームへ名刺や十ドル札を投げた人もいた。「困ることがあったらすぐ知らせなさい」「訪ねて行くよ。さようなら」。

彼女は、担架にのせてくれた駅長の大きな手を握りしめて泣いた。

### 療養の日々

当初高熱が続き、六年の入院が必要、「絶対安静」と言われるほど、サナトリウムでは重症患者の一人であった。多分、いつも死を前にして日々を過ごしていたに違いない。しかし、彼女は見舞客が一番多い「幸な病人」であった。毎週欠かさず、見舞ってくれた人もあった。

「あの列車の一乗客より」の名で、折に触れ、プレゼントが贈られてきた。カレッジの学友からは毎月小包みが贈られ、いつも新しいパジャマ、歯ブラシ石鹸などを買う必要がなかった。無名で医療費も送られて来た。

三年後の退院日、彼女は主治医のところに行き、礼を述べ、医療費の精算をしようとする、口が悪いので有名な主治医は、「バカ、もうもらったよ」と荒っぽく言った。そして立ち上って私の肩に手をおいて、「よかった、癒ってよかった」と言う。優しい手であった。「マイギャル、カレッジ！（お嬢さん、勇気を出して行け）」。医療費の一部は彼自身のポケットから出

ていたらしい。その彼は、「発病の外国人学生は即刻帰国」という法律があるにも拘らず、「薬も食物も乏しい日本に本病人を帰せない」と頑張って、三年の療養を可能にしてくれたのだった。

犬養さんは言う、「私があの大病にかかわらず生きて、今在るのは、アメリカのコモン・マンのおかげです」。彼女もまた、その後、無名でニューヨークのカレッジとサナトリウムに寄付を送りつづけていたという。

さらに詳しくは、上記の「アメリカン・アメリカ」や「お嬢さん放浪記」（角川文庫1958）に述べられている。これらでは、病気の苦しさや不安などは殆ど語っていないが、周りの人たちがいかに助けてくれたか、直前まで敵国であった日本人の貧しい学生、結核患者に寄せられた米国の普通の人たちの親切が語られている。

### その後

彼女は、それからヨーロッパへ渡り、勉強を続け、1968年帰国した。聖書研究の傍ら、世界の飢餓・難民問題に関わり続けた。現代の発展する世界の中で、取り残されている人々のために2017年96歳の高齢まで発信し続けた（「人間の大地」中央公論社）。精力的に取り組み、世界の難民キャンプや紛争地に赴いて活動、飢えた子どもの救済をした。難民に奨学金を支給する犬養道子基金も設立した。

彼女のエネルギーのもと、若くして結核を病み、異国で多くの普通の人たちに助けられた経験があったのは間違いないであろう。

付言：犬養道子の母方の曾祖父は、明治の医学者・衛生官僚であり、日本の感染症対策や衛生行政の基礎を築いた長與専齋で、専齋の三男長與又二郎は道子の叔父で、病理学者、東京帝国大学総長でもあったが、結核予防会結核研究所の初代の所長を務めた。🐼